

第二十七回和辻哲郎文化賞 一般部門 受賞作

亀井 俊介 著 『有島武郎 世間に対して真剣勝負をし続けて』

(2013. 11. 10 ミネルヴァ書房)

亀井 俊介 東京大学名誉教授 岐阜女子大学教授

かめい しゅんすけ 1932年(昭和7年)8月14日生まれ 82歳 岐阜県中津川市出身。

アメリカ文学・文化、比較文学・文化。

東京大学文学部英文学科卒業、同大学院人文科学研究科比較文学比較文化専攻博士課程修了。文学博士(東京大学)。東京大学専任講師、助教授、教授、東京女子大学教授を経て現職。

『近代文学におけるホイットマンの運命』(1970年 研究社出版/学士院賞受賞)、『内村鑑三 明治精神の道標』(1977年 中公新書)、『サーカスが来た! アメリカ大衆文化覚書』(1976年 東京大学出版会, 2013年 平凡社ライブラリー/日本エッセイスト・クラブ賞受賞)、『アメリカン・ヒーローの系譜』(1993年 研究社出版/大佛次郎賞受賞)、『亀井俊介の仕事』全五巻(1987~1995年 南雲堂)、『アメリカ文学史講義』全三巻(1997~2000年 南雲堂)、『アメリカ文化と日本』(2000年 岩波書店)、『わがアメリカ文化誌』(2003年 岩波書店)、『わがアメリカ文学誌』(2007年 岩波書店)、『英文学者 夏目漱石』(2011年 松柏社)ほか多数。

受賞のことば

和辻哲郎文化賞授与のお知らせをいただき、喜びと驚きを味わっています。哲学者和辻哲郎の名に、私は清冽な情と高度な知の合体した面影を思い浮かべます。が、私の受賞作は愚直で原初的な「文学」熱の産物なのです。

私はアメリカ詩人ホイットマンの愛読者ですが、日本でホイットマンを最もよく読み、全人格でもって受け止め、自分の文学に生かした作家は有島武郎でしょう。私はその有様を中心にして彼の評伝を書きたかった。彼がアメリカに留学してホイットマンを知り、自己に目覚め、文学者を志すまでは一気に書きました。が、そのあと彼が代表作『或る女』を仕上げるまでの「文学」創造の姿がよく見えなくて、何年間も中断したあげく、批評理論的なものは一切退け、ただ作品を懸命に読んで自分自身とつき合わせるという文学研究の原点から再出発して、仕上げたのがこの本なのです。それが評価していただき、私はこういう原初的な研究に、希望を甦らせているところです。

《選考委員評》につづく

《選考委員評》

梅原 猛

今回、最終候補作になった五点はいずれも独自の主張を展開する個性的な作品であり、捨てがたいものがあつたが、亀井俊介氏の『有島武郎 世間に対して真剣勝負をし続けて』がひときわすぐれている点で選考委員の意見がほぼ一致した。

日本の近代小説の主流は自然主義の影響を受けた私小説風の作品であるが、それは西洋の本格長編小説とは多分に性格を異にする。ところが、日本の作家のなかで本格長編小説を志した作家がいる。その一人が有島武郎であることは疑い得ない。

有島武郎は薩摩藩の重臣の息子であり、有島生馬及び里見弴の長兄である。彼は、その兄弟及び武者小路実篤、志賀直哉などとともに白樺派の中心人物とされるが、武者小路実篤などの楽観的な人生観をもつ作家とは違って、甚だ良心的で苦悩に満ちた人生を送った作家である。

亀井氏の受賞作は、この良心的な人生の矛盾に悩む、現在では忘れられた作家、有島武郎の人生をつぶさにたどるものであり、そこでは著者が彼と綿密な対話を繰り返しているかのようである。一般的な評伝のように有島の人生を他人事のように淡々と語るのでもなく、また彼の人生について第三者的に批評するのでもない。あたかも彼の人生の悩みを自ら悩み、彼の人生の喜びを自ら喜ぶような作品である。

私はこの作品を読むことによって、まだ読んではいない彼の試みた本格小説『或る女』を読もうという気は起こらなかったものの、日本政府が戦後になって実現した農地解放をそれより二十五年前にいち早く行い、情死という異常な死を選んだこの大正デモクラシーの良心というべき有島武郎という人物に深い哀惜の情を禁じ得なかったのである。

山折 哲雄

今日、有島武郎の名は知っていても、その主著『或る女』を読む人の数は寥々たるものだろう。この作品に私がふれたのは中学生のときだったが、菊池寛の『真珠夫人』とともに、そのヒロインの新鮮な魅力に心を奪われたことをよく覚えている。

札幌農学校に入ってキリスト教に入信し、米国留学をへて「白樺」派の人気作家となった有島は、人道主義の旗を掲げて、夏目漱石の後継者とまでいわれた人物だった。

そのような曲折の道を歩いて、表現力豊かな『或る女』を完成させるまでの作家の人間性を微細に点検し、その心理の深層を分析してみせたところに本書の見どころがある。とりわけ、理想を追求してや

まない性向と、他方それを裏切るかのような感情過多の告白癖の矛盾に探りを入れて、大正期に固有の「煩悶青年」だったことを明らかにしている点は、その執拗な筆遣いとあいまって読む者の心に迫る。

もう一つ面白かったのは、米国留学時代を含めてさまざまな女性たちとふれ合い、愛と性の遍歴といってもいいような体験を重ねていたという指摘だった。作者によれば有島はじつに惚れっぽい男で、そのため多くの女たちにもてたのであろう。端正な風貌といい、人道主義的な言動といい、女性の関心を引きやすい人間だったことがうかがえる。その顛末を知らされて読みすすむうち、有島武郎のドン・ファン的な振舞いが何となく現代風「光源氏」のそれを思わせるような匂いを放っていることに気づかせられた。愛の遍歴のはてに波多野秋子と出会い、世俗的な解決をきらって情死を選ぶにいたるところまでが、雲隠れして姿を消す光源氏の末期の運命と重なってみえてくるのである。

『或る女』はわが国ではしばしば珍しい「本格小説」の金字塔といわれてきた。本書の作者にはその意味を問う気持があったと思われるが、それよりもむしろ本書は、有島武郎における人間の研究として独自の輝きを放っているように私は思う。

阿刀田 高

有島武郎という実験

大変おもしろく読んだ。

有島武郎と言われ、本格小説と聞くと「古いのかなあ」と思わないでもなかったが、読後には、その実、この労作は文学の、小説家の今日的なテーマを伏在させている、と知った。

まず『或る女』の評価である。前編と後編と、ややトーンを変え、作家の意図の変化を感じさせる筆致が目立ち、それが弱点とも言われているが、吟味すれば、この小説は“どうやら女の「生」ないし「性」を武郎のように文学で真っ向から扱うことは、道徳的にか芸術的にか、たやすくは受け入れられなかった状況、（本書 225 P）の中で“「或る女」は、日本における覚醒期の初めに現はれた女で衝動は感じてみながら、如何にして動くかを知らず男子と自分との調和を知らないために、墮落し煩悶する悲劇的経路を書いて見よう、（本書 221 P）という目的をみごとに叶えている。一人の女性を描きながら主眼はその時代にあり、しかも小説として充分におもしろい。このあたりを本書はやわらかく語ってくれて楽しい。

もっと強く興味を引かれたのは…説明はむつかしいのだが、倫理と“ふしだら”の問題だ。倫理的に充分に清く、正しく生きている人でありながら異性との関係において、あえて言えば“ふしだら”と評

しなければならぬ人格は世上にかいま見えている。それはなぜなのか。ただ単に「下半身のことはわからない」と卑俗な表現で揶揄すればそれですむことなのか。人間の本質に関わるものを含んでいるのではないのか。有島武郎の生涯は、まさにこのテーマを含んでいる。亀井俊介さんがどこまでこのテーマを本書で意図したかは定かではないが（あえてぼかしているようにも感じられるが）これは小説家を主人公としたときに一番語りやすいテーマであり、今日でもあまり俎上に載らないテーマでもある。やや恣意的ではあるが、私は一人の小説家としてこの点を刮目して眺め、想像を広げて読んだ。